

運動部活動での挫折からの立ち直りについての質的研究 ——支えになった他者との関わりに着目して——

竹田 光輝 畑 琴音¹ 早稲田大学 八巻 秀 駒澤大学 鈴木 伸一 早稲田大学

Qualitative study on recovery from setbacks
——Focusing on relationships with supportive others——

Koki TAKEDA, Kotone HATA¹ (Waseda University), Shu YAMAKI (Komazawa University),
and Shin-ichi SUZUKI (Waseda University)

Many students in sports clubs quit clubs because of various maladjustments. It is also known that some students recover from maladjustments and continue to compete. Interactions with others are an essential factor in this recovery. We conducted interviews with three participants in a sports club and developed a model of the recovery process from a setback in sports club activities by focusing on the relationship with others. The results of this study indicated that the recovery process could be classified into four stages. Stage 1: experiencing setbacks; Stage 2: stagnation; Stage 3: regaining motivation to compete; and Stage 4: achieving recovery. We also obtained valuable suggestions regarding the content and timing of relationships with others that contributed to the recovery process. In the future, it would be necessary to increase the sample size, including participants that did not recover and conduct longitudinal surveys to examine the results in more detail.

Key words: sports clubs, setbacks, recovering

Waseda Journal of Clinical Psychology
2021, Vol. 21, No. 1, pp. 49 - 56

中学校や高等学校における運動部活動は、多くの生徒が参加する学校での活動の1つである。スポーツ庁(2019)によると、運動部活動はスポーツ技能向上のみならず、生徒の生きる力の育成、豊かな学校生活の実現に重要な役割を果たすと考えられている。また、学校運動部活動の効果をまとめたレビューによれば、運動部活動による教育効果は、「学校適応」、「学力」、「性格」、「ストレス・精神健康」、「心理社会的発育発達」、「生活習慣」などに類型化されることが明らかになっている(今宿・朝倉・作野・嶋崎, 2019)。

このように、運動部活動は様々な教育効果を得られる可能性が示される一方で、活動での種々の問題により、退部に至ってしまう場合も少なくない(横田, 2001)。公立高校3校を対象に、運動部活動における中途退部の実態を調査した研究では、316名の運動部員のうち、3割以上の120名が中途退部していたことが報告されている(横田, 2001)。また、運動部活動での

問題が深刻化すると、神経症の症状や不登校、引きこもりなどの不適応につながることも指摘されている(土屋, 2013)。

こうした運動部活動で経験する不適応状態全般を「挫折」と定義し、スポーツ選手が挫折から立ち直る過程について検討した研究が行われている(和・遠藤・大石, 2011)。首都圏のスポーツ推薦入学の大学1年生59名を対象として、(a)挫折の内容(b)当時の心境(c)立ち直りのきっかけの3点について自由記述式の質問紙を用いて調査し、KJ法を用いて分析している。その結果、立ち直りのきっかけとして、「周囲の人の大切さ」、「気持ちを切り替えること」、「心身向上の必要性」、「あきらめないことの大切さ」があげられることを示している(和他, 2011)。

挫折からの立ち直りのきっかけとなる要因として、他者との関わり的重要性が示されてきている。具体的には、挫折からの立ち直りのためには、他者からのサポートがあること、さらに家族や友人など自分をちゃんと見てくれている人の存在が重要であることが示されている(矢島・石川, 2014)。また、大学生の挫折と

¹ 日本学術振興会特別研究員 (Japan Society for the Promotion of Science)

ソーシャルサポートとの関連について検討した研究がある(神原, 2009)。その研究では、挫折時にソーシャルサポートを受けていたと認知している者ほど、挫折後の自己成長感が高く、「挫折を経験することで、精神的に成長したり強くなったりする」という挫折観を持つ傾向にある可能性が示されている。これらの研究から、挫折からの立ち直りの過程において、他者との関わりが重要な役割を担っていると考えられる。

しかし、これまでの研究において、運動部活動での挫折からの立ち直りの過程を、他者との関わりに注目して整理した研究は少ない。運動部活動では、その多くがチームとして共通の目標に向かい日々活動している。そのため、チームメイトやコーチなど他者との関わりがより重要となる。例えば、運動部活動において、他者とのコミュニケーションがバーンアウトの抑制(田中・水落, 2013)や、部活動適応感を高める上で重要な要因である(越・関澤, 2009)ことが示されている。そのため運動部活動に限定した挫折経験からの立ち直りの過程を他者との関わりに注目して整理、理解する必要がある。

そこで本研究では、運動部活動での挫折経験からの立ち直りの過程をインタビュー調査によって調べ、その結果を質的分析の Grounded Theory Approach (以下 GTA) (Strauss & Corbin, 1998 躁・森岡訳 2004) に準じて分析し、立ち直りの過程について、1つのモデルの作成を試みる。また本研究では、立ち直りの際に重要であるとされている他者との関わりについても着目し、立ち直りの過程のどの時期に、どのような他者との関わりが立ち直りに寄与したのかについても検討する。

研究方法

調査対象者

本研究では、基準・選択サンプリング・合目的サンプリングにより(岩壁, 2010)、大学生3名を対象とした(以降、対象者それぞれをA, B, Cと表す)。基準・選択サンプリングとは、研究に先立って定めた基準を満たした個人を研究対象として選び出すことを指し、合目的サンプリングとは、研究の進行にともなって、状況に合わせて最も関連度の高いデータを集める方法を指す(岩壁, 2010)。本研究における対象者の適格基準として(a)中学・または高校の運動部活動での挫折経験があること、(b)その当時に、競技を継続したことを設定した。また、対象者ごとの挫折経験の内容が重ならないように対象者を選出した。本研究における挫折経験の定義は、近藤・宮戸(2018)の定義を用い、「目標をもって続けてきた学業、人間関係、部活動など、自分にとって重要である事柄が途中でだめになり、感情に変化が及ぶこと」とし、内容を運動部活動に限定した。また、「立ち直り」の判断基準は、近藤・宮戸

(2018)を参考に、現在本人が主観的に立ち直りを果たしていると感じていることとした。対象者3名ともインタビュー時点で立ち直りを果たしていると明言したため、全てのデータを分析対象とした。

調査方法・分析方法

本研究では、運動部活動での挫折からの立ち直りがどのような過程を辿るのかについて、支えになった他者との関わりに注目して検討した。そのために、対象者の言葉による語りを、文脈に沿って分析することが重要であると考えた。したがって、調査方法として半構造化面接によるインタビュー調査を選択した。分析方法はGTAを用いた。岩壁(2010)によると、GTAは「ある体験には、どのような段階や通過点があり、それらがどのような順序で進んでいくのか」ということや、「まだ理論的理解が十分ではない」問題を明らかにするのに適しており、「プロセス、行為、複数の人たちの相互作用」を対象とする分析手法である。本研究は、運動部活動での挫折経験からの立ち直りの過程を検討することが目的であり、類似した研究の少なさから理論的理解が十分であるとはいえないため、GTAを用いて分析することが適切であると考えられた。様々なGTAのバージョンの中でも、先行研究において分析手続きの明確さが主張されている(平田, 2015)、Strauss & Corbin(1998 躁・森岡訳 2004)に準じた。具体的な手順は次の通りである。(a) 切片化：逐語データの中から、「運動部活動における挫折からの立ち直りの過程」に関連するデータを抜き出し、切片化した。(b) コード化：切片化されたデータ1つ1つに対して、その意味内容を的確に表しており、文脈に沿う形でコードをつけた。(c) カテゴリー化：コード化されたデータを比較し、類似したコードをまとめ、そのまとまりに名前をつけて、カテゴリーを生成した。カテゴリー名をつける際にはコードの持つ文脈から離れないように、随時データまで戻り、コード化まで戻るという作業を繰り返した。さらに、内容的に共通の上位概念で括れる複数のカテゴリーをまとめた。これらのカテゴリーを本研究では下位カテゴリー、中位カテゴリー、上位カテゴリーと呼ぶ。(d) 概念図の作成：生成されたカテゴリーから、「運動部活動における挫折からの立ち直りの過程」についての仮説モデルを作成した。なお、分析が研究者の価値観や経験からの推測に偏らないようにするため、他者視点を取り入れる目的で、第一著者の所属研究室の大学院生、学部生の複数名での合議によりコード化、カテゴリー化の作業を行った。

調査手続き

インタビューガイドの作成 インタビューを実施する際、岩壁(2010)を参考に、事前にインタビューガイドを作成した(Table 1)。質問の順序はインタビュー

Table 1 インタビューガイド

領域	知りたい事柄	詳細	具体的な質問
挫折の内容	競技への思い入れ	競技の内容	何の競技をいつからされていたか。
		競技への思い入れ	挫折をされた当時の部活動での目標はありましたか。
	挫折の原因・種類	挫折を経験した時期	挫折をされたのはいつですか。
		挫折経験の内容	挫折経験はどのような内容でしたか。
		挫折経験に至るまでの経緯	挫折経験に至った経緯を教えてください。
立ち直りの過程	挫折直後の心境	気持ちの変化	挫折を経験された前と後では、競技に対してどのような気持ちの変化がありましたか。
		具体的な行動	挫折直後は、どのような行動をとっていましたか。
	立ち直りまでの経過		挫折経験直後から、立ち直れたと思えるようになるまでの経緯を教えてください。
立ち直りの過程で 支えになった 他者との関わり	他者の種類		挫折経験から、立ち直りの過程において、支えになった人はいましたか。
	関わりの種類		支えになったと感じたのは具体的にはどのような関わりでしたか。
	他者との関わりによる気持ちの変化		そうした人との関わりがあったことでどのように気持ちが変化しましたか。

対象者との会話に応じて変更し、適宜質問を追加していく形で半構造化面接を進めた。

インタビュー実施 インタビューの日程に関しては、事前に調査対象者と連絡を取り合い、所要時間が60分程度かかる旨を伝えた上で、日程を決定した。また、本研究では、Web 会議システムを用いてお互いの顔が同時に画面に表示される形でインタビューを行った。その際調査対象者の同意の上で、レコーディング機能により、インタビューを録画し、後に逐語に起こした。

倫理的配慮 インタビュー調査を実施するにあたり、対象者には研究への協力は任意であること、また途中での離脱による不利益は一切生じないことを事前に説明した。また、得られた個人情報、データは研究以外の用途では使用しないこと、研究が終了した後に消去することを説明した。

結 果

対象者の特徴

本研究の対象者3名は、A（男性、22歳）、B（男性、22歳）、C（男性、22歳）であった。また、Aの挫折内容は顧問の先生に認められないこと、Bの挫折内容は怪我、Cの挫折内容は試合に勝てないことであった。

分析の結果

本研究では運動部活動での挫折からの立ち直りの過程を他者との関わりに注目して検討することを目的に半構造化インタビューを行い、GTAを用いて分析した。その結果、生成されたカテゴリーは下位カテゴリーが39個、中位カテゴリーが20個、上位カテゴリーが10

個となった。生成されたカテゴリーをまとめたものをTable 2に示した。以下、上位カテゴリーを『 』、中位カテゴリーを〔 〕、下位カテゴリーを[]、コードを〈 〉で表した。

挫折経験から立ち直りまでの過程

挫折経験から立ち直りまでの過程として、生成されたカテゴリー間の関係性を概念図に示した（Figure 1）。生成されたモデルは、岩壁（2010）があげている理論的飽和の基準に達するには不十分なものの、A、Bの分析を終えた段階で、Cのデータを加えても大きく上位カテゴリーが変わることがないことを確認したことで、一定の仮説モデルが生成されたと判断した。挫折経験からの立ち直りの過程は、Strauss & Corbin（1998 躁・森岡訳 2004）版のGTAに準じた分析により生成されたカテゴリー間の関連から、Ⅰ－Ⅳ期に分けられた。また、本研究ではⅡ期からⅢ期までの間において主に他者との関わりが見られた。生成されたカテゴリーについて、各時期に分けて説明していく。

Ⅰ期 挫折経験期 Ⅰ期は、それまで続けてきた競技において、挫折を経験する時期を指している。Ⅰ期は、『困難への直面』で構成されている。『困難への直面』には、[理想と現実のずれ]、[認めてもらえないことによる混乱]、[怪我による絶望]が含まれる。

Ⅱ期 停滞期 Ⅱ期は、『困難への直面』を通して、それまであった競技への思いやモチベーションが一時的に停滞する時期であり、挫折経験直後から、競技への動機づけを再び高めるまでの期間を指している。Ⅱ期は、『停滞』、『感情表出』、『チームメイトからの関わ

Table 2-1 カテゴリー表

上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー
困難への直面	理想と現実のずれ	自分が試合で活躍できなくて、練習もきついということに耐えられなかったのかもしれない。(C)
		中学2年生以降はスタメンとして試合に出場していたが、厳しい練習をしているのに、なかなか勝てず、全然楽しくなくなり、練習にも行きたくなく、遠征の前日も本当に嫌だった。(C)
	認めてもらえないことによる混乱	顧問にラッキーボーイと言われ、認められていないと感じて、これ以上どうすれば良いかわからなかった。(A)
		顧問に認められようとするあまり、空回りをして怒られ、ダメになったという感覚があり、高校2年の間はずっとキツかった。(A)
感情表出	怪我による絶望	2度目の怪我は2年の秋で、大事な時期で感覚的に酷いと感じることで、もう戻れないだろうと思い、プレーヤーをやめて、マネージャーや学生コーチになろうかと考える。(B)
	家族に対する八つ当たり	家族は干渉しないので相談はしないが、強く当たる。(A)
	信頼している人たちへの弱音の吐露	怪我をした直後はマネージャーに、もうメンタル面でもやられて無理かもしれないと話す。(B)
		練習終わりに心配して声をかけてくれた先輩や同期の前では弱音を吐かなかったが、最後まで残ってくれた同期のキャプテンと同期の前では泣いてしまう。(A)
停滞	練習に身が入らなくなる	自分からどうしたら良いか聞いて、頼りになる先輩や同期から言葉をもらう。(A)
		新人戦が終わってから、具合は悪くないが、練習が嫌で早退したり、継続的ではないがたまに練習を休んでいて、練習に乗り気でなくなる。(C)
	競技継続の迷い	1年間はずっとキツくて、練習を休みたいと思っていた。(A)
		医者に行って検査をし、前の怪我よりもひどくないとわかってからも、二週間くらいプレーヤーを退こうか悩む。(B)
周囲からの見守られ感	周囲からの期待	遠征に行っても勝てず、大きな休みを挟んだ後の遠征は特に嫌で、本当にやめようかと悩む。(C)
		母親は、せっかく親元離れてバスケしにきてるのに、また試合に出るのを楽しみにしてるんだから諦めて欲しくないと言われる。(B)
	自分を気にかけてくれる人からの声かけ	クラスメイトからのバスケ部の良いイメージを壊したくないという思いと、試合をみにきてくれた時にバスケの良さとか面白さを知ってもらえるように頑張らなきゃという思いがある。(A)
		小学校から面識のある先輩や、同期が、下を向かないように、アドバイスや励ましの声をかけてくれることで、見てくれてるんだと感じる。(A)
	日常生活での支え	声をかけてくれる人がいることで乗り気ではない普段の練習も休まず頑張れる。(A)
		顔に出やすく、周りからも落ち込んでいるように見えていたから、声をかけてくれたのだと思う。(A)

Table 2-2 カテゴリー表

上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー
チームメイトからの 関わりかけ	チームメイトからの鼓舞	同期のキャプテンに喝を入れられる。(A) 同期のキャプテンにやめようか悩んでいることを話して、ここまで頑張ってきたのに諦めるのかと怒られる。(B)
	チームメイトからの 戦術的なアドバイス	副キャプテンに戦術的なことを聞く。(B)
やめる選択肢の提案		お母さんから辞めても続けてもどちらでもいいよと声がけをもらう。(C) 父親とマネージャーは、辞めるのも一つの選択肢、無理するなよと心配してくれる。(B)
現状の再認識	自分の活躍と他者からの 評価による現状の再認識	県選抜に自分と同期の一人が選ばれたことで、この代なら県でも通用すると思えたことで、少し自信がつき、徐々に乗り気じゃない時期から抜け出せるようになる。(C) 自分が選抜に選ばれたり、試合で活躍し始めたことでバスケが面白くなったことが抜け出す要因となる。(C)
	検査結果による現状の再認識	病院の検査を受け、頑張ればそんなに時間がかからないかもと感じ、また頑張ろうと思う。(B)
他者の存在による 競技への動機づけ	チームメイトに対する 自分のプライド	チームメイトとは弱みを言い合うことはなく、自分が悩んでいた時も、同じ状況でチームメイトは誰もやめようとしておらず、主力の自分が辞めるわけにはいかないと思う。(C) 最高学年がこのまま下を向いては良くないと思い、空回った気持ちをを払拭する。(A)
	顧問を見返したいという思い	自分を評価してくれない顧問を見返したいと思う。(A)
	同じ怪我をした選手が存在	同じ怪我から立ち直った選手を調べる中で、自分の好きなバスケ選手が同じ怪我をして復帰し、活躍したことを知り、自分も頑張れるかもしれないと思える。(B)
自発的な競技への動機づけ		自分の判断でやっていることだから自分の判断に責任を持ちたいと思う。(C) 練習を休んだら自分に負ける、自分に負けたくないという気持ちがある。(A)
		最後は後悔しない方にしようと思い、また頑張ろうと思う。(B)
挫折経験への肯定的評価	同様の経験への耐性の向上	高3の時に怪我から頑張って戻った経験をしたおかげで、今は怪我に対する怖さがなくなった。(B)
	挫折経験の ポジティブな面の発見	挫折経験を振り返ってみると、悔しさやもどかしさを自分のやる気にかえられたので、結果としては良かったと思う。(A) 挫折を乗り越えた経験は今思えば、大きなアドバンテージになった。(C)

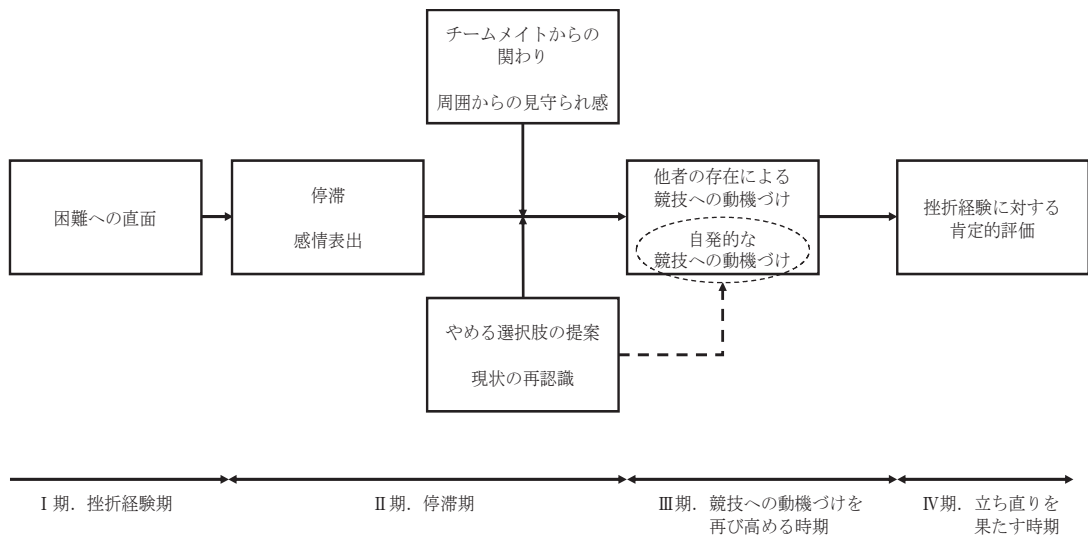


Figure 1 概念図。

り、『周囲からの見守られ感』、『やめる選択肢の提案』、『現状の再認識』で構成されている。『停滞』には「練習に身が入らなくなる」, 「競技継続の迷い」が含まれる。『感情表出』には, 「家族に対する八つ当たり」, 「信頼している人たちへの弱音の吐露」が含まれる。『チームメイトからの関わり』には, 「チームメイトからの鼓舞」, 「チームメイトからの戦術的なアドバイス」が含まれる。『周囲からの見守られ感』には, 「周囲からの期待」, 「周囲からの声掛けや気遣い」, 「日常生活での支え」が含まれる。『やめる選択肢の提案』は中位カテゴリーをそのまま, 上位カテゴリーとした。『現状の再認識』には, 「自分の活躍と他者からの評価による現状の再認識」, 「検査結果による現状の再認識」が含まれる。

Ⅲ期 競技への動機づけを再び高める時期 Ⅲ期は, 停滞の時期を乗り越え, 再び競技に向き合っていくという動機づけが高まる時期を指している。Ⅲ期は, 『他者の存在による競技への動機づけ』, 『自発的な競技への動機づけ』で構成されている。『他者の存在による競技への動機づけ』には, 「チームメイトに対するプライド」, 「顧問を見返したいという思い」, 「同じ怪をした選手が存在」が含まれる。『自発的な競技への動機づけ』は中位カテゴリーをそのまま, 上位カテゴリーとした。

Ⅳ期 立ち直りを果たす時期 Ⅳ期は, 挫折経験を払拭し再び競技に向き合うことができた後, 挫折経験を振り返って, 挫折経験を肯定的に評価する時期である。Ⅳ期は『挫折経験への肯定的評価』で構成されている。『挫折経験への肯定的評価』には, 「同様の経験への耐性の向上」, 「挫折経験のポジティブな面の発見」が含まれる。

考 察

本研究の目的は, 運動部活動での挫折経験からの立ち直りの過程について, 他者との関わりに注目した一つのモデルを検討することであった。対象者3名のインタビューについて, GTAを用いた分析によって, 生成された10個の上位カテゴリー間の関連により, 運動部活動での立ち直りの過程を4期に分けたモデルを整理した。

カテゴリー間の関連

概念図に示したモデルの構成について, まず, カテゴリーを時間軸に沿って配置している。次にカテゴリー間の関連について示す。挫折を経験した後, 対象者たちは「競技継続の迷い」を抱える, 「練習に身が入らなくなる」という『停滞』の状態へ陥っていた。この「停滞期」において対象者は, 様々な他者との関わりに支えられ, なんとか競技を継続できていたことが考えられた。そのため他者との関わりを表す『チームメイトからの関わり』, 『周囲からの見守られ感』, 『やめる選択肢の提案』は, 「停滞期」の経過に位置するように矢印を伸ばした。挫折を経験し, 競技への動機づけを失っていた対象者は, 「停滞期」を乗り越えると, 他者の存在をきっかけとして, あるいは自発的に, 競技への動機づけを再び高めることができるようになっていた。また, 「停滞期」に見られた『やめる選択肢の提案』, 『現状の再認識』は, 「停滞期」の対象者を支えると同時に, 競技への動機づけを自発的に高めることにも繋がっていることが考えられたため, 『自発的な競技への動機づけ』に矢印を伸ばした。さらに本研究では, 立ち直りを, 現在本人が主観的に立ち直りを果たしてい

ると感じていることと定義したが、対象者の語りから、挫折経験を振り返ったときに、挫折経験を肯定的に評価していることが立ち直りを果たす基準であることが考えられた。

他者との関わりについて

本研究では、対象者の語りから、立ち直りに寄与したと考えられる他者との関わりを抽出し整理した。本研究で得られた挫折からの立ち直りの過程から、「停滞期」をいかに乗り越え、「競技への動機づけを再び高める時期」に移行するかが重要であると考えた。そのため、「停滞期」に見られた他者との関わりについて主に考察していく。

まずは、[周囲からの期待]、[自分を気にかけてくれる人からの声がけ]、[日常生活での支え]という関わりが見られた。これらは、「挫折を乗り越えるためには家族や友人、自分をちゃんと見てくれている人の存在が重要である」という矢島・石川（2014）の知見からも、立ち直りに寄与した関わりである可能性が高いと考える。「停滞期」の対象者は、挫折経験によって絶望や混乱を感じており、今後の競技の継続について悩み苦しんでいる状態である。その状況において、周囲から期待の言葉や、励ましの声かけをもらうことで、自分は1人ではなく周りには見てくれている人がいると感じることができ、「停滞期」を乗り越える力を得ることができたと考える。

次に、[チームメイトからの鼓舞]という関わりが見られた。これに関して、対象者からは〈同期で支えになったのはキャプテンで、自分の顔色が変わるとすぐに気づかれて、喝を入れてくれた〉という語りが見られており、ずっと一緒に頑張ってきたチームメイトから鼓舞されることが、情緒的な支援（近藤・宮戸，2018）として対象者を支えた可能性が示唆された。競技の継続を諦めかけている対象者に対して、喝を入れるという関わり方をすることで、対象者を思いとどまらせ、もう一度考え直すきっかけを与えることになったのではないかと考える。また、[チームメイトからの戦術的なアドバイス]という関わりも見られた。これは、具体的支援（近藤・宮戸，2018）と捉えることができ、対象者が競技に関して今後どのようにしていけば良いのか、戦術面でのアドバイスを具体的に示すことで、それが道標となり、支援として機能したのではないかと考える。

さらに、[競技継続の迷い]を抱えている対象者に対して、『やめる選択肢の提案』という関わりが見られた。これは後の『自発的な競技への動機づけ』につながる関わりであったことが示唆された。競技をやめることには多少後ろめたさを感じている対象者に対して、両親やマネージャーといった身近な存在が、[辞めても続けてもどっちでもいいよ]という関わりをすること

で、対象者は競技をやめるという選択肢も、続けるという選択肢と同様に考えることができたと推察する。そのため、結果として自分で選択できるという感覚が強まり、[自分の判断でやっていることだから自分の判断に責任を持ちたいと思う]というように自発的に動機づけを高める過程につながったのではないかと考える。これは自己決定性の高さが、内発的動機づけを高めるという自己決定理論からも説明可能であると考えられる（岡田，2010）。

次に、「停滞期」を乗り越え、再び動機づけを高める際に寄与した他者の存在としては、「同じ状況で頑張っているチームメイト」、「顧問の先生」、「同じ怪我をした選手存在」があげられた。これらの他者の存在も立ち直りの動機づけとして、重要な役割を果たしたと考える。特に怪我による挫折を経験したBにとって、同じ怪我の診断名を下された選手のエピソードは自身の体験に重ねやすく、復帰に向けた希望になったと考える。

他にも、インタビュー時点において挫折経験を振り返ると、対象者からは「挫折を乗り越えた経験は今思えば、大きなアドバンテージになった」というように、挫折経験を肯定的に評価しているなど、心理的な成長が伺えるような語りが見られた。この結果は、挫折経験からの立ち直りの過程においてソーシャルサポートを受けることで、挫折感も肯定的になるという神原（2009）の知見を支持している。すなわち、対象者たちは、挫折からの立ち直りの過程における他者との関わりが支えになっていたために、挫折経験を肯定的に評価することにつながった可能性があると考えられる。

本研究の限界点と今後の課題

最後に本研究の限界点と今後の課題について述べる。まずは、GTAの手法に関連する限界点について2点あげる。1点目は、研究手法の準拠が不十分であることである。本研究が準拠したStrauss & Corbin（1998 躁・森岡訳2004）版のGTAは、カテゴリ生成の際に、カテゴリを特性や次元で分類している。しかし、本研究では、より上位のカテゴリへと統合する過程において、合議のみで決定している。そのため、研究の緻密さには限界があると考えられる。2点目は、理論的飽和の妥当性が低いことである。理論的飽和とは、新たにデータを加えても、新しいカテゴリが生成されず、それまでに生成されたカテゴリによって、すべて説明がつく状態を指す（岩壁，2010）。しかしながら、本研究の対象者は3名と少なかったこと、対象者が挫折から立ち直りを果たした者のみであったことから、さらにデータを加えることによって新たなカテゴリが生成される可能性は否定できない。そのため、より精緻に検討するためには、対象者の数を増やし、立ち直りを果たせなかった者まで対象者を広げて検討

する必要がある。また、上述した研究手法の不十分さにより、本研究ではリサーチクエスションの十分な解決に至らなかった。そのため、今後はリサーチクエスションに対して整合性のとれた調査を正しい手続きで実施する必要がある。

次に、本研究は、対象者の過去の挫折経験を想起してもらう形で、インタビューを行った。より正確に挫折からの立ち直りの過程を得るためには、現時点で挫折をしている者を対象として縦断調査を行う必要があるだろう。

高生競技者の質的研究の観点から 体育学研究, 56, 89-103.

横田 匡俊 (2001). 高校運動部における中途退部の実態と要因の検討 日本体育学会大会号, 52, 208.

矢島 裕子・石川 清子 (2014). 青年期における挫折の乗り越えと社会的知恵の関連性 (3) —挫折経験を一人で乗り越えるということ— 日本心理学会第78回発表論文集.

引用文献

平田 祐太郎 (2015). 小学校における発達障害児童の保護者と担任教師の協働を支えるスクールカウンセラーのアプローチ —グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成— 教育心理学研究, 63, 48-62.

今宿 裕・朝倉 雅史・作野 誠一・嶋崎 雅規 (2019). 学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題 体育学研究, 64, 1-20.

岩壁 茂 (2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究方法とプロセス 岩崎学術出版社.

神原 知愛 (2009). 大学生の挫折感と挫折乗り越えとの関連: 自己成長感, ソーシャルサポートに着目して 慶應義塾大学大学院社会科学部研究科紀要, 社会心理学教育学, 人間と社会の探究, 68, 183-186.

越 良子・関澤 敬子 (2009). 中学生の部活動適応感における部活動内ソーシャル・サポートの機能 心理学研究, 80, 4, 345-351.

近藤 茉莉依・宮戸 美樹 (2018). 挫折経験から立ち直りまでのプロセス—立ち直りを促進する要因の検討—横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター研究論集, 18.

岡田 涼 (2010). 自己決定理論における動機づけ概念間の関連性—メタ分析による相関係数の統合パーソナリティ研究, 18, 2, 152-160.

Strauss, A. & Corbin, J. (1998). Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory (2nd edition) (操 華子・森岡 崇訳 (2004). 『質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順— (第2版)』医学書院) スポーツ庁 (2019). 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン, Retrieved from https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf, (2021年5月7日)

田中 輝海・水落 文夫 (2013). 男性スポーツ選手におけるバーンアウト傾向の深刻化とポジティブ感情の関係性 スポーツ心理学研究, 40, 1, 43-57.

土屋 裕睦 (2013). スポーツ臨床と動機づけ 西田 保 (編) スポーツモチベーション: スポーツ行動の秘密に迫る, 大修館書店, 187-200.

和 秀俊・遠藤 伸太郎・大石 和男 (2011). スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直りの過程: 男性中